

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業  
・国際交流拠点形成事業)

事業者名：博物館をみんなのものに～視覚障害児童・生徒へのスクールプログラム～ハンズオンとワークショップを中心に

住 所：東京都台東区上野公園13番9号

TEL：(3822) 1111 (代表)

FAX：(3822) 1492

HPアドレス：<http://www.tnm.jp/>

連携事業者名：東京都立八王子盲学校、東京都立文京盲学校、  
独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館

会 場：東京国立博物館(東京都台東区上野公園13番9号)  
東京都立八王子盲学校(東京都八王子市台町3丁目19番22号)

東京都立文京盲学校(東京都文京区後楽1丁目7番6号)

事業期間：平成22年5月 ～ 平成23年3月5日



## 1. 館の使命と本事業の関係

### (1) 館の使命

東京国立博物館は、わが国の総合的な博物館として日本を中心に広く東洋諸地域にわたる文化財を収集・保管して公衆の観覧に供するとともに、これに関連する調査研究および教育普及事業等を行うことにより、貴重な国民的財産である文化財の保存および活用を図ることを目的とする。

### (2) 本事業の関係

東京国立博物館は、質量ともに誇る日本や東洋の貴重な文化財を、すべての来館者を対象に伝えていく使命をもっているが、現実には、障害をもつ人たちへの対応には、いまだ不十分なところがある。特に、視覚障害をもつ児童・生徒の来館はきわめて稀で、その理由には、当館の受け入れ態勢ができていないことや、当館からの発信が不十分な点にある。この事業により、視覚障害を持つ人々が、若いうちから博物館に親しみをもち、継続的に博物館利用につながれば、利用国民的財産の文化財を広く観覧に供し、活用を図るという館の使命を満たすことができる。

## 2. 企画内容

### ①事業目的

障害を持つ人たちが博物館に親しむための事業の一環として、今回は特に、視覚障害をもつ児童・生徒の受け入れ態勢を整え、その対応のためのボランティアの人材育成を行う。盲学校との連携、受け入れを継続的に実施可能にするための基盤作りと、他館が同様のことを取り組む際の参考になるモデル事業となることを目指す。こうした取り組みは今までになかったことであり、新しい取り組みとして実施する。

### ②事業概要

東京都立八王子盲学校美術科教諭の大坂ふみ江氏、東京都立文京盲学校美術科教諭の山本識氏、障害者への美術・視聴覚教育の経験を持つ真下弥生氏、視覚障害当事者であり、視覚障害者の美術鑑賞の有識者の半田こづえ氏、展示室や学校貸出用のハンズオン教材の制作と実施に経験のある九州国立博物館および当館職員を中心として、視覚障害者や盲学校のニーズの把握、教材とスクールプログラムの開発、ネットワーク作り、ボランティアの研修を行う。あわせて、盲学校、博物館でのプログラムの実施、盲学校教員への教員研修会、次年度以降の受け入れ態勢の基盤を作る。

### 3. 事業実績

#### (1) 事業の主な内容及び日程

##### 1) 事業の概要

- ①調査研究委員会
- ②プログラム・教材開発
- ③ボランティア研修
- ④盲学校教員への研修会



事前授業の様子



見学プログラムの実施

##### 2) 事業日程

実施時期	計画事項		
	①連携事業者等 打ち合わせ(委員 名簿は別紙1)	②プログラム・教材開発、 実施	③ボランティア研修 (講師名簿は別紙2)
5月中旬	協力者選定	東京国立博物館、九州国立博物館の既存教材の確認	ボランティア募集開始
6月20日 於：平成館第四会議室	第一回調査研究委員会 13:30～16:30	①メンバーで方針の決定 新規教材開発開始、既存教材の応用検討 九州国立博物館「きゅうぱっく」貸与	ボランティア23名決定(うち1名辞退) 調査研究委員会メンバーで、今後のボランティア研修の方針決定
7月25日 於：平成館小講堂			第一回ボランティア研修(障害者理解、視覚障害者理解、博物館に必要なもの) 真下弥生氏、半田こづえ氏 13:30～16:30
8月28日 於：平成館小講堂	第二回調査研究委員会 9:30～12:30	教材制作進み具合の報告、盲学校アウトリーチプログラムの検討	第二回ボランティア研修(盲学校と美術教育について) 大坂ふみ江氏、山本識氏 13:30～16:30
10月4日於：八王子盲学校		八王子盲学校の授業見学、プログラム検討	第三回ボランティア研修(実地) 八王子盲学校 9:55～12:30
10月16日 於：小講堂	第三回調査研究委員会 9:30～12:30	学校でのプログラム検討 ハンズオン教材の報告	第四回ボランティア研修(実例紹介 水戸芸術館現代美術センター教育プログラムコーディネーター森山純子氏、白鳥建二氏) 13:30～16:30
11月1日 於：小講堂			第五回ボランティア研修 盲学校でのプログラムについて、教材を使つての研修とディスカッション 13:30～16:30
11月22日 於：文京盲学校		文京盲学校にてプログラム実施	第六回ボランティア研修(実地)
11月29日		八王子盲学校にてプログ	第七回ボランティア研修(実地)

於：八王子盲学校		ラム実施	
12月18日 於：小講堂	第四回調査研究 委員会 9:30～12:30	見学対応プログラム検討	第八回ボランティア研修 盲学校の博物館見学に向けて、 教材を使つての研修とディス カッション 13:30～16:30
1月24日 於：東京国立博物 館本館		東京国立博物館で文京盲 学校見学対応 14:00～15:50	第九回ボランティア研修(実地) 13:00～17:00
2月10日 於：東京国立博物 館本館		東京国立博物館で八王子 盲学校見学対応 3:00～14:50	第九回ボランティア研修(実地) 12:30～17:00
2月13日 於：小講堂	第五回調査研究 委員会 9:30～12:30	盲学校対応用スクールプ ログラム作成、 触地図作成	第十一回ボランティア研修(実 例紹介：国立民族学博物館 広 瀬浩二郎氏) 13:30～16:30
3月5日 於：東京国立博物 館本館		盲学校教員対応スクール プログラム研修会	第十二回ボランティア研修(実 地) 10:00～17:00

## (2) 参加者の数

調査研究委員：計12人

バリアフリーボランティア：22人

教員研修会参加者数：36人

## (3) 事業により作成した印刷物等

①「東京国立博物館 盲学校のためのスクールプログラム」冊子

②「東京国立博物館 スクールプログラム おみやげキット 日本の模様」

## (4) 実施事業に関する新聞記事等

### ○新聞記事

該当なし

### ○テレビ、関連誌等

該当なし

#### 4. 事業の成果及び今後の課題

##### (1) 事業の成果

###### 1) ボランティア育成

時期：平成22年7月25日～平成23年3月5日のうち、全12回

場所：東京国立博物館小講堂、各展示室、都立八王子盲学校、都立文京盲学校、

参加者：東京国立博物館生涯学習ボランティアのうち、希望者22名

内容・目的：講義、ワークショップ、実地体験により、視覚障害者理解を深め、博物館における盲学校の生徒の対応を行うための育成を行った

###### 2) 教材開発

目的：盲学校の生徒の博物館鑑賞のために必要な、触ることで理解を深める、ハンズ・オンを中心とした教材開発を行った

内容：1. 本館模型 2. 日本の模様・貝合せ 3. 触知図

4. 東京国立博物館スクールプログラムおみやげキット（日本の模様）

5. 展示室での鑑賞で使用するハンズオンツール

###### 3) スクールプログラム開発

内容・目的：上記教材を利用した盲学校の生徒のためのプログラムを開発し、実践を積んだ上でスクールプログラムとしてパッケージ化した。限られた時間での博物館訪問で、博物館や日本の伝統文化に親しみを持ち、目的をもった訪問ができるようにした。また、冊子作成とホームページでのダウンロードを可能にすることで、より学校側が利用しやすいようにした。

###### 4) 「盲学校のためのスクールプログラム」教員研修会の実施

時期：平成23年3月5日

場所：東京国立博物館本館

参加者：全国盲学校教員および博物館関係者36人

内容・目的：全国盲学校教員を招いて「東京国立博物館 盲学校のためのスクールプログラム」を紹介し、体験していただく。盲学校教員の立場から助言をいただき、盲学校とのネットワークを作り、来年度以降への布石とした。

##### (2) 今後の課題

###### 1) ボランティアの継続的研修

視覚障害児童に対応するため、継続的に理解を深め、経験を積む必要がある。視覚障害者の理解と誘導の仕方、言葉や体、ハンズオンツールを使った展示作品の表現など、今後も継続的に資質向上のため、研修を行う必要がある。

###### 2) 継続的な教材およびプログラム開発

プログラムの選択を増やし、視覚障害児童にとって、より質の高い豊かな鑑賞につなげるため、今後も教材やプログラムの開発を行う。

###### 3) 継続的なネットワーク作り

盲学校とのつながりをもち、より博学連携をしやすいするためのネットワーク作りを継続して行い、ニーズを探り、博物館に足を運ぶための工夫を行う。

###### 4) 対象の拡大とユニバーサル化

単一障害児童から、重複障害児童への対応、個人で来館する場合や大人の視覚障害者の対応までが望まれている。また、視覚障害のみでなく、一般来館者（晴眼者）の博物館体験につながるユニバーサル化が課題となる。